

白隠禪師坐禪和讃

衆生本来仏なり 水と氷の如くにて  
水を離れて氷なく 衆生の他に仏なし

衆生近きを知らずして 遠く求むるはかなきよ

譬えば水の中に居て 渴を叫ぶが如くなり  
長者の家の子となりて 貧里に迷うに異ならず

六趣輪廻の因縁は 己が愚痴の闇路なり  
闇路に闇路を踏みそえて いつか生死を離るべき

夫れ摩訶衍の禪定は 称嘆するに余りあり  
布施や持戒の諸波羅蜜 念仏懺悔修行等  
その品多き諸善行 皆この中に帰するなり

一坐の功を成す人も 積みし無量の罪ほろぶ  
悪趣何処に有りぬべき 浄土即ち遠からず

辱なくもこの法を 一たび耳に触るる時  
讃嘆随喜する人は 福を得ること限りなし

況や自ら廻向して 直に自性を証すれば  
自性即ち無性にて 已に戯論を離れたり

因果一如の門ひらけ 無二無三の道直し  
無相の相を相として 往くも帰るも余所ならず  
無念の念を念として 謡うも舞うも法の声

三昧無礙の空ひろく 四智円明の月さえん  
この時何をか求むべき 寂滅現前するゆえに  
当処即ち蓮華国 この身即ち仏なり